

在籍校名 篠栗町立篠栗中学校  
職・氏名 教諭 山口 拓郎

## 研 修 報 告 書

このたび、長期派遣研修員として、下記のとおり研修をしましたので報告いたします。

### 記

#### 1 研修種別

D 福岡県教育センター研修員

#### 2 主題研修について

研究主題 「自己有用感を高める生徒指導の一考察

－保健体育科学習における『ポジティブトーク』の活用を通して－

##### (1) 研究のねらい

###### ア 課題の背景

在籍校において、日頃の学校生活や授業、学校行事での活動を客観的に見ると、友人へ前向きな発言をしていたり、集団の中で一生懸命頑張ろうとしていたりする姿を多く見ることができる。しかし、自己評価のためのアンケートやワークシートの記述を見ると、自分への評価は厳しい生徒が多い実態がある。これらの実態から、他者や集団と関わる活動の中で、自分の働きかけが友人や学級の役に立っていると実感できていないため、自分への評価が厳しくなっているのではないかと捉えた。そこで、自分の前向きな言動は、他者や集団に対してよい影響を与えていると感じ、自分のことを肯定的に捉えることができる生徒を育成したいと考えた。そのためには自己有用感を高めることが重要であると考え、本主題を設定した。

###### イ 研究の目的

生徒の自己有用感を高めるために、保健体育科学習において1単位時間における導入と終末で活用する「ポジティブトーク」の有効性を検証する。

###### ウ 研究の仮説

保健体育科学習において、1単位時間における導入と終末で「ポジティブトーク」を活用すれば、生徒の貢献感、承認感、存在感が高まり、生徒の自己有用感が高まるだろう。

##### (2) 研究の構想

###### ア 主題の説明

###### (ア) 主題について

本研究における自己有用感とは、他者や集団との関係の中で、自己の姿を肯定的に受け止める感覚のことである。「高めよう！自己有用感」（栃木県総合教育センター）では自己有用感について「個人内の感覚であること。かつ、自分自身を肯定的に捉える感覚であること。」「あくまでも他者の存在や他者との関わりを前提にして生まれる。」と述べられている。また、「良好な人間関係の中で他者に役立つような行動をし、それが他者に認められることによって他者や集団における存在感が高まることで自己有用感が高まる。」と述べられている。そこで、自己有用感を高めるために、授業の中で一人一人の生徒が互いのよいところやよさを認め合いながら、結果や出来栄のみではなく、思いや行動にも目を向けて他者のよい部分を伝えたり助言したりする活動を仕組む必要があると考える。このような活動

を通して、他者の役に立つような行動をしているという貢献感と他者から認められているという承認感、他者や集団の中で自分は大切な存在であるという存在感を実感し、自己有用感が高まると考える。そこで、本研究で目指す「自己有用感が高まった生徒」の姿を次のように示す。

○ 他者や集団に対して、自分が役に立つ行動をしていると実感している生徒	【貢献感】
○ 他者や集団から、自分の行動や存在が認められていると実感している生徒	【承認感】
○ 他者や集団の中で、自分は大切な存在であると思うことができる生徒	【存在感】

#### (イ) 副題について

「ポジティブトーク」とは、他者と関わりながら「役に立つような行動をした」「認められた」「自分はこれでいいんだ」という自己に対して肯定的な感覚を実感するために、前向きな考えと言葉を使って目標設定と相互評価する活動のことである。「前向き」とは、積極的・建設的なことである。すなわち「前向きな考えと言葉」とは、課題解決や改善に向かって進むために物事のよい点や可能性を捉えた考えや言葉のことである。「『ポジティブトーク』の活用を通して」とは、貢献感、承認感、存在感(以下、三つの感覚)を実感するために、実践する教科の目標に応じて活動形態をその都度設定し、毎時間の導入と終末に位置付け、継続して積み重ねることである。

中学校学習指導要領解説(保健体育編)において、「体育や保健の見方・考え方を働かせることができるような学習過程を工夫することが求められる。」と述べられている。ポジティブトークを通して前向きな言葉で励まし合うことは運動に自信がなかったり不安に思っていたりする生徒の支えになることにつながる。ポジティブトークを行うことは保健体育科としてのねらいに迫ることはもちろん、自己有用感を高めるために大変意義深い活動であると考えられる。そのため、本研究では、保健体育科学習を通して、自己有用感を高めたい。

### イ 研究の内容

#### (7) 研究の具体的構想(図1)

本研究では、生徒一人一人の実態が異なるため、三つの感覚の感じ方に違いが出ることを考える。実施する領域やその内容に応じて特に実感させたい感覚に焦点を当てて授業を展開する。実証授業ⅠとⅡではバレーボールを実施する。実証授業Ⅲでは体づくり運動を実施する。

実証授業Ⅰでは、ペアでの活動を通して三つの感覚を実感させ、自己有用感を高めることを

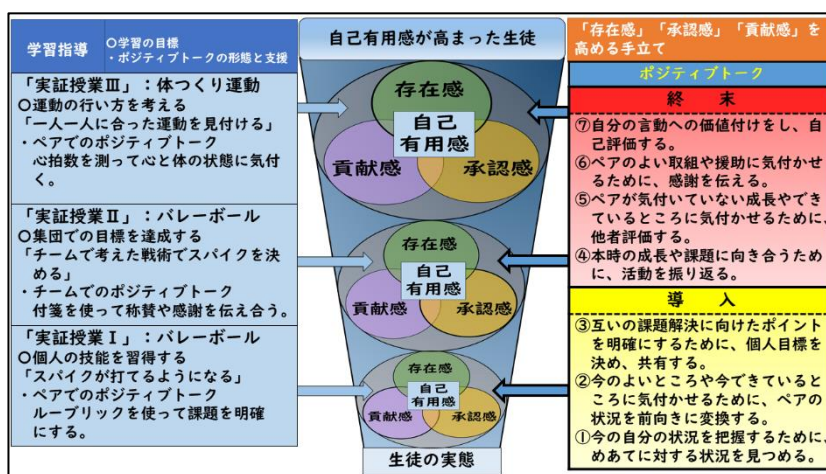


図1 研究構想図

を目指す。毎時間、導入と終末にペアでポジティブトークを行う。具体的にはペアで前向きな言葉を用いて目標を考えたり互いに援助や助言に対する称賛や感謝を伝え合ったりする。これらの活動で特に、自分の行動が他者の技能向上に貢献していると実感できる(貢献感)と考える。実証授業Ⅱでは、チームでの活動を通して三つの感覚を実感させ、自己有用感を高めることを目指す。毎時間の導入と終末にチームでポジティブトークを行い、チームの目標に対する個人目標を共有したりチーム内で称賛や感謝を伝え合ったりする。これらの活動で特に、自分の行動や発言がチームメイトから認められていると実感できる(承認感)と考える。実証授業Ⅲでは、ペアでの活動を通して三つの感覚を実感させ、自己有用感を高めることを目指す。毎時間の導入と終末にペアでポジティブトークを行い、ペアで一人一人の違いに応じた動きを認め合ったりその人に合った運動を称賛し合ったりすることで、特に、自分のことを大切な存在であると思うことができる(存在感)と考える。

#### (イ) ポジティブトークの仕組み（表1）

導入で行うポジティブトークでは、本時の活動の課題解決に向けた見通しをもつために、ペアやグループで具体的な行動目標を設定し、共有する。まず、自分の現状を把握するためにめあてに対する達成度や心情を学習プリントに記入する。その際、教師の支援として、ルーブリックを使って今の自分の達成度を確認できるようにする。また、技能面ではなく心情面の状況でもよいことを助言する。次に、ペアに現時点できているところやよいところに気付かせるために、ペアの状況を前向きな考えや言葉に変換する。その際、教師の支援として、前向きな考えや言葉をペアに伝えやすくするために、捉え方変換表を準備する。最後に、課題解決に向けたポイントを明確にするために、具体的な個人目標を学習プリントに記入し、共有する。その際、互いの援助目標も共有する。

終末で行うポジティブトークでは、本時の活動における自分のよさを自覚するために相互評価を行う。まず、自己評価として、本時での成長や課題に向き合うために、本時の活動を通して感じたことを記入する。次に、他者評価として、ペアが気付いていない成長やできるようになったこと、頑張っている姿に気付くことができるように、ペアの成長や活動に取り組む姿に対して称賛を行う。その際、教師の支援として、様々な視点からよいところやできているところを伝えるために、よいところの例のプリントを準備する。さらに、ペアのよい取組や援助していることのよさに気付くことができるように、援助やアドバイスしてくれたことについての感謝を伝え合う。最後に、自己評価として、ペアや教師の言葉を基に自分の言動への価値付けをし、自分に対して肯定的な評価をする。その際、教師の支援として、本時の活動におけるよい取組を全体に共有する。

ポジティブトークは他者と学習プリントを交換しながら書いたり話したりすることで、行動目標を設定したり相互評価を行ったりする。自分と他者の考えや感じたことを明確にして伝えたり、自分の活動を客観的に把握するために学習プリントを活用する。

#### (ウ) 検証の方法

検証は、実証前後に行った三つの感覚に関するアンケート（4件法）、生徒の発言や行動、学習プリントの記述、授業後の生徒へのインタビューの分析で行う。

### (3) 研究の実際（対象：A町立B中学校第2学年C組39名）

#### ア 抽出生徒について

事前調査において貢献感、承認感、存在感ともに低い結果であった生徒Aを抽出生徒とし、その変容を述べる。

#### イ 実証授業Iの実際と考察

#### (7) 実証授業Iの実際

実証授業Iでは三つの感覚の中で、貢献感を特に実感すると考え授業を展開した。そのため、導入と終末においてペアでのポジティブトークを設定した（表2）。導入におけるポジティブトークではルーブリックを使って互いの現時点での達成度と課題を明確にし、目標を共有した。生徒Aは、初めに「ステップができるか不安。」と記述しており、学習に対して不安を感じていることが分かる。そこに、ペアから「一緒に練習しよう。」と前向きな言葉をかけられたことによって生徒Aは「ステップを練習する。」と前向きな目標を考えることができていた。また、仲間への援助目標を「声かけ（教え合う）」と記入しており、協働的な学習を進めようとする姿が

表1 ポジティブトークの仕組み

ポジティブトーク		
1単位時間	導入	終末
目的	課題解決の見通しをもつ	自分の行動のよさを自覚する
内容	行動目標を考え共有する	相互評価をする
ねらいと方法	①今の自分の現状を把握するために、めあてに対する状況を見つめる。 ②今のよいところや今できているところに気付かせるために、ペアの状況を前向きに変換する。 ③互いの課題解決に向けたポイントを明確にするために、個人目標を決め、共有する。	④本時の成長や課題に向き合うために、活動を振り返る。（自己評価） ⑤ペアが気付いていない成長やできているところに気付かせるために、称賛する。（他者評価） ⑥ペアのよい取組や援助に気付かせるために、感謝を伝える。（他者評価） ⑦自分の言動への価値付けをし、自分に対して肯定的な評価を行う。（自己評価）
手立てと教師の支援	①ルーブリック ②捉え方変換表 ③目標の価値付け	④⑤よいところ例のプリント ⑥⑦よい取組の共有

表2 生徒Aとペアによる導入と終末のポジティブトークの記述内容

生徒Aによる導入でのポジティブトークの内容			
ねらいと方法	①今の自分の状況を把握するためにめあてに対する状況を見つめる。	②今のよいところやできているところに気付かせるために、ペアの状況を前向きに変換する。	③互いの課題解決に向けたポイントを明確にするために、個人目標を決め、共有する。
生徒Aとペアの記述内容	ステップができるか不安。 (生徒A)	一緒に練習しよう。 (ペア)	ステップを練習する。声掛け(教え合う)。 (生徒A)
生徒Aとペアの記述内容	楽しもう。 (生徒A)		
生徒Aによる終末でのポジティブトークの内容			
ねらいと方法	④本時の成長や課題に向き合うために、活動を振り返る。	⑤ペアが気付いていない成長やできているところに気付かせるために、他者評価する。	⑥ペアのよい取組や援助に気付かせるために、感謝を伝える。 ⑦自分の言動への価値付けをし、自己評価する。
生徒Aとペアの記述内容	前よりできていてうれしかった。 (生徒A)	前よりも絶対にうまくなったよ。 (ペア)	最後まで全力で教えてくれてありがとう。 (ペア)
生徒Aとペアの記述内容			チームの人たちのおかげで自分も上達していると思う。 (生徒A)

また、仲間への援助目標を「声かけ（教え合う）」と記入しており、協働的な学習を進めようとする姿が

見られた。展開ではペアでスパイクの練習を行った。練習では互いにアドバイスをしながらスパイクの練習を行うことができていた。終末のポジティブトークでは導入で共有した目標を基に、ペアから「前よりもよくなったよ。」と生徒Aの成長に対して称賛されており、「最後まで全力で教えてくれてありがとう。」と援助に対する感謝が述べられていた。最後に生徒Aは「自分も成長できたと思う。」と自分の成長を感じ取ることができていた。

(イ) 考察

事前調査と実証授業 I 後の貢献感に関するアンケートを比較すると、0.18 p 向上していた (図 2)。また実証授業 I で貢献感を特に実感した生徒が 38% (12 人) いた。生徒Aはインタビューにおいてペアへのアドバイスの具体的なポイントを答えている (資料 1)。また、特に貢献感を実感した生徒の中には「アドバイスをして仲間が以前より強いスパイクを打てるようになっていた。」と感想に記述している生徒がいた。インタビューと生徒の記述から貢献感を実感した生徒はペアの課題と目標を捉えており、アドバイスをしたことによりペアへよい影響を与えていることを実感していることが分かる。導入のポジティブトークでルーブリックを使って、ペアと課題を共有し、技能向上へのポイントを明確にした上で相互評価をしたことが貢献感の実感に効果があったと考える。以上のことから、実証授業 I においてポジティブトークを活用することは貢献感の実感に有効であったと考える。

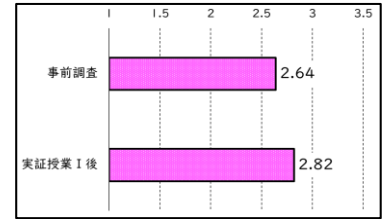


図 2 貢献感の変容

資料 1 生徒Aへのインタビュー

教師：今日の授業を受けてどうでした。  
 生徒A：とても楽しかった。  
 教師：どんなところが楽しかった。  
 生徒A：ペアを組んだ生徒がたくさん声をかけてくれたから。  
 教師：あなたもアドバイスとかしたの。  
 生徒A：うん。  
 教師：どんなアドバイスをしましたか。  
 生徒A：「腕の肘をまっすぐに」って。  
 教師：ペアの人はどんな反応をしたの。  
 生徒A：「ああそう！わかった！」ってやってくれた。  
 教師：そのときどんな気持ちでしたか。  
 A生徒：とてもうれしかった。

資料 1 生徒Aへのインタビュー

ウ 実証授業 II の実際と考察

(7) 実証授業 II の実際

実証授業 II では、三つの感覚の中で、承認感を特に実感すると考え、授業を展開した。そのため、チームでのポジティブトークを設定した。導入ではチームの目標に対する個人の目標を考えた。生徒Aは、「全員で打つ。」というチームの目標に対し、「自分の全力で頑張る。」と個人の目標を設定し、チームで共有した。展開段階では、スパイクゲームと作戦の時間を交互に行った。終末ではチームメイト全員に対し付箋で称賛や感謝の言葉を伝え合う時間の設定をした。生徒Aはチームメイトに対して具体的な内容での称賛や感謝を伝えていた (図 3)。チームメイトは生徒Aに対し技能のことや頑張ろうとする姿への称賛や感謝を伝えていた。

生徒Aによるチームメイトへのメッセージ	生徒Aに対するチームメイトからのメッセージ
スパイクとか上手で真似してみたら自分もできた。ありがとう。	急な対応もちゃんとできていたし、フェイントも上手だと思います。
みんなのことを引っ張ってくれたから頑張れた。	スパイクやみんなで攻める姿勢の雰囲気やスパイクがとてうまく参考になりました。ありがとう。
積極的にやってくれたり声掛けとかしてくれたりしたからこっちも頑張れた。	一生懸命に走ったり、打とうとしていたりする姿がよかったよ。

図 3 生徒Aとチームメイトが記述した付箋の内容

(イ) 考察

事前調査と実証授業 II 後の承認感に関するアンケートを比較すると、0.47 p 向上していた (図 4)。また実証授業 II で承認感を特に実感した生徒が 19% (6 人) いた。生徒Aのインタビューでは付箋をもらったことにより自分の活躍を実感していることが分かる (資料 2)。また、特に承認感を実感した生徒の中に「今日は目標としていたカバーができてみんなから褒めてもらったのでうれしかった。」と記述している生徒がいた。インタビューと生徒の記述から承認感を実感した生徒はチーム全員から称賛を受けたことをうれしく感じていることが分かる。終末でのポジティブトークを通して、付箋を使ってチーム全員で個人の目標に対する付箋で称賛や感謝の言葉を伝え合う時間の設定をしてことが承認感の実感に効果があったと考える。以上のことから、実証授業 II ではポジティブトークを活用することが承認感の実感に有効であったと考える。

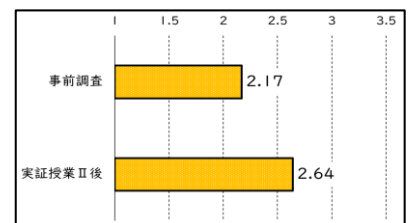


図 4 承認感の変容

資料 2 生徒Aへのインタビュー

教師：バレーの授業どうでした。  
 生徒A：チームとちゃんと協力できて楽しかったです。  
 教師：自分がみんなのために活躍したと感じていますか。  
 生徒A：あまり感じなかったけど、付箋をもらってこんなことをしていたんだなと思った。  
 教師：自分ではそう感じてはいないんだけどいつの間にか自分が活躍できているんだということが分かってきましたか。  
 生徒A：(うなずいて) はい。

資料 2 生徒Aへのインタビュー

## エ 実証授業Ⅲの実際と考察

### (7) 実証授業Ⅲの実際

実証授業Ⅲで実施する体づくり運動では、全員共通となる同じような技能習得に関する目標がないため、運動に関する目標が一人一人違うことになる。このような違いを認め合うことが存在感を実感することにつながると考える。そのため、存在感が三つの感覚の中で、特に実感すると考え授業を展開した。導入と終末ではペアでのポジティブトークを設定した。導入では互いの心と体の状態に気付くために、心拍数を基に体調や心の状態を伝え合った後、ポジティブトークを行った。本時では生徒Aは授業を見学していた。「できることはやりたい。」と言っていたため、導入と展開の初めには参加せず、授業中盤から活動に参加した。終末に行ったポジティブトークでは、ペアで互いに課題解決に向けた動きや課題解決に向けた取組に対して相互評価ができるように、運動後の心拍数を基に互いの心と体の状態の変化を共有した。生徒Aの感想の記述には「頑張った。」しか書かれておらず以前の授業のような感想の内容ではなかった。一緒に活動した生徒は「見学でも参加していたね。」と生徒Aができることを頑張っていた姿を称賛した。

#### (イ) 考察

事前調査と実証授業Ⅲ後の存在感に関するアンケートを比較すると、0.13p 向上していた(図5)。また実証授業Ⅲで存在感を特に実感した生徒が27%(10人)いた。実証授業ⅠやⅡにおける自己評価で自分の課題点やできなかったことについて記述をしていた生徒が実証授業Ⅲでは、できたことやよかったことなど前向きな評価をすることができていた。途中から参加した生徒Aは積極的に仲間と関わりながら

活動を行うことができおり、言葉としての表出は少ないが自分の活動や姿を認めることができていた。生徒の記述と生徒Aの授業中の様子から存在感を実感している生徒は一生懸命取り組んだ自分の姿や自分のよいところを客観的に捉えることができるようになり、人と比べることなく、自己内評価ができるようになっていた。これまでポジティブトークを通して互いに前向きな考えや言葉を使って目標設定と相互評価を継続して積み重ねてきたことが、自分のことを前向きに捉える存在感の実感に効果があったと考える。

#### (4) 全体考察

自己有用感の高まりについて述べる。事前調査と実証授業後で三つの感覚に関するアンケートを比較すると、すべての感覚において数値の高まりを見ることができた(図6)。さらに、アンケートの項目別で数値の変容を見ると自己に対する肯定的な感覚の数値も高まりを見せた

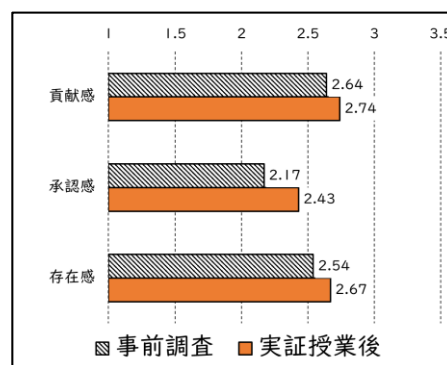


図6 三つの感覚の変容

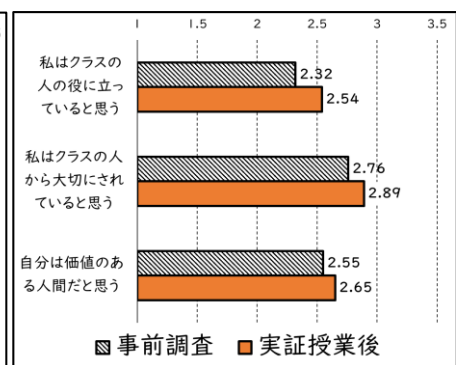


図7 自己に対する肯定的な感覚の変容

(図7)。このことから、1 単位時間の導入と終末にポジティブトークを位置付け、前向きな考えや言葉を使って行う目標設定と相互評価を毎時間積み重ねることは、自己有用感を高める上で有効だったと考える。

しかし、生徒の三つの感覚の感じ方や特に実感した感覚は、研究の構想で考えていたものとは違う部分があった(図8)。実証授業Ⅰにおける生徒の記述を分析すると「うまくなったと言われてうれしい。」や「できるようになったところを褒められてうれしい。」など、半数以上の生徒はペアを援助した

ことより、自分の技能向上に関することへの印象が強く残っていた。これらの結果から、個人技能習得に向けてペアで行うポジティブトークは、ペアに対して役に立つ行動をしたという貢献感より、自分の行動や頑張り、技能の向上などがペアに認められたという承認感を強く感じる要因になったと考える。

実証授業Ⅱでも半数近くの生徒が感想にうれしかったことを記述しているが、実証授業Ⅰとは違い、「協力して勝つことができうれ

しかった。」や「上げたボールをうまく打ってくれてうれしかった。」など、チームの目標達成に関する記述が多かった。これらの結果から、チームの目標達成に向けて個人目標を設定・共有するポジティブトークを行ったことがチームの目標達成に向けた意欲につながった。そして、チームの全員で目標に対する行動や頑張りを称賛し合ったことがチームの役に立つことができたという貢献感を強く感じる要因になったと考える。

存在感は貢献感や承認感のように半数以上の生徒が突出して強く感じないことが分かった。しかし、実証授業Ⅰ・Ⅱで行ったバレーボールでは、徐々に単元の後半に存在感を実感している生徒が増え、実証授業Ⅲでは、実証授業Ⅰ・Ⅱより高い数値となっている。また、実証授業Ⅲのような技能の向上を伴わない単元でも生徒の感想から「協力してできた。」や「褒められてうれしかった。」という貢献感や承認感に関する内容が半数以上あった。これらの結果から、貢献感と承認感を繰り返し実感することで存在感をより強く実感させることができるのではないかと考える。さらに、存在感をよりよく実感するためには、単元の前半に承認感と貢献感を実感した上で、単元の後半でこれまでの自分の活動を振り返ることができるようなポジティブトークを仕組む必要があると考える。

## (5) 研究の成果と今後の課題

### ア 研究の成果

- ポジティブトークのような前向きな考えや言葉を使った目標設定と相互評価を行う活動を授業に位置付け活用することは、貢献感、承認感、存在感を実感し、自己有用感を高めるために有効であった。
- 個人技能習得に向けた授業においてペアでポジティブトークを活用することは、自分の行動や技能の高まりがペアから認められたと感じる承認感の実感に特に効果があった。
- 集団での目標達成に向けてポジティブトークを活用することは、目標に対する自分の行動や頑張りが集団に貢献したと感じる貢献感の実感に特に効果があった。

### イ 今後の課題

- 運動特性に着目して、他の運動領域において同等の成果が表れるか確認する必要がある。
- ポジティブトークのような目標設定や相互評価を保健体育以外の教科や領域、行事などでも活用できるようにするための活動内容の改善が必要である。

#### <参考文献>

- ・ 栃木県総合教育センター(2013) 『高めよう！自己有用感』

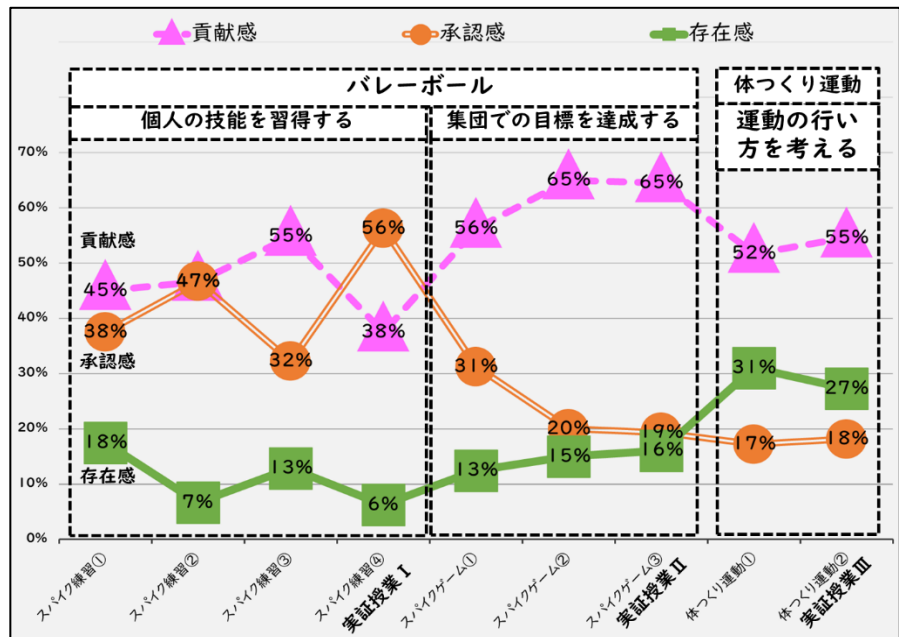


図8 授業の中で一番強く感じている感覚の推移

【添付資料】

1 評価規準と評価方法について

	貢献感	承認感	存在感
目 標	他者に向けた助言や補助が仲間や集団の向上に役に立つことができたと感じている。	自分の行動や発言が他者から認められていると感じている。	他者との活動を通して、自分は大切な存在であると感じている。
評価規準	他者に向けて行った助言や補助に関する内容を書き出したり述べたりしている。	他者からの称賛や感謝の言葉を前向きに受け止めている。	自分の活動や取組に対して肯定的な評価をしている。
評価方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習プリントにおける記述</li> <li>・授業中の様相観察</li> <li>・三つの感覚に関するアンケート</li> <li>・振り返りの記述</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習プリントにおける記述</li> <li>・授業中の様相観察</li> <li>・三つの感覚に関するアンケート</li> <li>・振り返りの記述</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習プリントにおける記述</li> <li>・授業中の様相観察</li> <li>・三つの感覚に関するアンケート</li> <li>・振り返りの記述</li> </ul>

2 実証授業の展開

(1) 実証授業 I

主眼

- ・選んだスパイクでタイミングよくボールを打つことができる。
- ・仲間の技能向上に向けて補助や助言しようとしている。

【知識・技能】

【主体的に学習に取り組む態度】

	学習活動・内容
導 入 10	1 本時の流れとめあてを確認する。 相手コートにスパイクを打ち込むために仲間へ前向きなアドバイスや補助をしよう。 2 具体的な行動目標を設定する。 ・うまくできそうなスパイク ・スパイクのポイント
展 開 30	3 課題解決に向けたスパイク練習を行う。 ・ネットを使ったスパイク練習 ・壁を使ったスパイク練習
終 末 10	4 相互評価で学習を振り返る。 ・他者への援助のよいところ 前向きなアドバイスや補助を行うことはスパイクの向上につながる。



(2) 実証授業 II

主眼

- ・話し合いや試合の場面でチームの課題解決に向けて最善を尽くしている姿やよい取組を見付け、伝えている。
- ・ルールや相手を尊重したり、仲間の健闘を認めたりして、フェアなプレイを守ろうとしている。

【思考・判断・表現】

【主体的に学習に取り組む態度】

	学習活動・内容
導 入 10	1 本時の流れとめあてを確認する。 スパイクゲームの中で、仲間のよいところを見付け、〇〇な言葉で伝えよう。 2 チームの課題解決に向けた個人の目標を考える。 ・チームと個人の目標
展 開 30	3 課題解決に向けたゲームを行う。 (1) スパイクゲームを行う。 ・攻撃のパターンの実践 (2) チームで作戦を考える。 ・戦術の成果と課題点 (3) スパイクゲームを行う。 ・攻撃のパターンの実践



終末10	4 相互評価で学習を振り返る。 ・他者への称賛 仲間のおいところを見付け、言葉で伝えることは、フェアなプレイにつながる。
------	--------------------------------------------------------------------

### (3) 実証授業Ⅲ

主眼

- ・運動の場面において、仲間の動きや能力に合わせた運動の行い方を伝えることができる。 【思考・判断・表現】
- ・仲間の体力や筋力など、個々の違いに応じた運動を認めようとしている。 【主体的に学習に取り組む態度】

学習活動・内容	
導入15	1 本時の流れとめあてを確認する。 力強い動きを高めるための運動の効果的な行い方をペアに伝えよう。 2 ペアで体と心の状態を交流する。 ・体ほぐし運動 3 具体的な行動目標を設定する。 ・自分の行動と他者への援助
展開25	4 力強い動きを高めるための運動の強度や回数、時間などを決める。 ・自己の体重を利用した腕や足の屈伸 ・同じ姿勢の維持 ・二人組での上体起こし ・ペアを背負って移動 ・道具の使用
終末10	5 相互評価で学習を振り返る。 ・他者への援助のよいところ

### 3 実証授業Ⅰの学習プリント

2年 バレーボール⑤スパイク習得編 氏名

めあて

今日の練習方法(5分ずつの2ローテ)

5分ずつネットと壁を入れ替える

**ループリック**

スパイクの現状と目標を設定しよう

項目	レベルMAX	レベル2	レベル1
助走	2歩助走からネットの手前で弾んで真上に跳ぶことができる。	2歩助走はできている。または、ネットとの距離が適正な位置で跳ぶことができる。	2歩助走ができていない。または、ネットとの適正な距離で跳ぶことができていない。
腕の振り	ネットより高い位置から、手のひらでボールを叩き、腕を振りぬくことができる。	手のひらでボールを叩くことができる。または、腕を振りぬくことができる。	ボールを叩くことができない。
ミート	タイミングよくボールを叩き、ネットに正対している。	ネットには正対している。	ネットに正対できず、ボールとのタイミングが合わない。
セッター	ネットの上にもうようにトスし、打つ人が気持ちよく打てる。	ボールの高さは、はくたい付近に置くことができる。	ボールが高すぎたり低すぎたりし、打つ人とタイミングが合っていない。

※自分とペアの状況を確認し、今日の授業で一番身に付けたところを確認しよう!

2年 バレーボール⑤スパイク習得編

**【ポジティブトークをしよう!! 最初の段階】**

**ポジティブトーク**

①今の自分の状態	②仲間に交換してもらおう!	③今日の行動目標	④今日の言葉
※仲間への援助の行動目標			

思い込め友達に話そう → 友達から聞いて一緒に考えよう → 目標達成に向けた合言葉

自分で考えよう!    仲間に考えてもらおう!    仲間へ伝えよう!    みんなで考えよう!!

**【ポジティブトークをしよう!! 終わりの段階】**

①今日の自分のできばえ(自分 or 援助)	②仲間に評価してもらおう!!	③評価してもらった人や仲間への感謝	④自分自身への言葉

思い込め友達に話そう → 評価されたことへの感謝を伝えよう → 自分のもも感謝していこう!

自分で考えよう!    仲間に考えてもらおう!    仲間へ伝えよう!!    自分もよくやった!

振り返り

今日の授業で一番感じたこと一つに○を付けてください

1. 仲間のためになることができたと思う	<b>一番強く感じた感覚</b> ※貢献感 ※承認感 ※存在感
2. 仲間から褒められたり認められたりしたことがうれしかった	
3. 自分のよさに気付くことができた。	

感想

※感想を書く際、下の内容のテーマから選んで、○を付けて記入してください。

**振り返りの記述**

( ①今日頑張ったこと    ②今日嬉しかったことや楽しかったこと    ③自分のよかったところ )

- 8 -